

宗教と国内人口移動・人口分布

——日本の事例——

拓殖大学 新田目夏実

1. 目的

人口移動現象はさまざまな要因の影響を受けているが、人口と経済の関係に比べ、文化的要因、特に宗教との関係について十分な研究がおこなわれてきたとは言い難い。そこで、本研究では日本の宗教人口分布と宗教的人口移動である巡礼を取り上げ、人口現象を理解する上で宗教理解がいかほど重要であるか、またいかに独特な表出形態をとるかを具体的に示したい。なお、「宗教」は確かに人間の行為の原因(独立変数)とみなすことも可能であるが、宗教的行為が発生する文脈を用意し意味付けを与える要因であるという点について、特に注目する必要がある。

2. 宗教研究と人口の地域分布

従来の人口研究における主たる関心は産業化・経済発展と都市化の関係であり、この意味で、文化的変数、特に宗教に関する関心はほとんどみられない。ただし、実際に宗教別人口の分布をみると、特定宗教(宗派)が特定地域に集中していることもまた事実である。このような宗教分布は歴史的偶然に由来する部分が多いとはいえ、山岳宗教については地理学における中心地理論の援用によってその分布構造を理論的に理解することが可能となる。また、「新宗教」の分布については、新宗教が現世利益と深く結びつき、都市下層民の救済機能を教義として内在化しているという社会学的研究との関連の中で、分布の法則性を理解することができる。本研究ではこの点について JGSS を用い検証した。

3. 宗教的人口移動としての巡礼

日本の初もうでやお盆の帰省に見るまでもなく、大量の人口が宗教を理由の一つとして世界中で毎年定期的に移動している。それにも関わらず宗教的人口移動研究は多いとは言えない。リーのフレームワークに依拠し分析すると、到着地の聖性・非日常性と、出発地と到着との間に存在する障害としての苦行性は、巡礼の一つの重要な特徴である。また移動要因を説明するにあたり、経済的機会格差による「押し出し」、「引っ張り」ではなく「宗教的魅力格差」が重要である。移動方向についてみると、山岳・辺境地域を含む遠隔地を目的地とし、しばしば複数聖地を経由する点で、従来の人口移動モデルにはない独特な移動パターンを示している。巡礼が通過儀礼である場合、ファン＝ヘネップやターナーが主張する如く、単なる地理的空間的移動にとどまらず、宗教的空間の中の地位変化を伴う現象である。

最後に西国巡礼と四国遍路についてみると、四国遍路は観音菩薩を安置する寺院を参拝する「本尊巡礼」であるのに対し、四国遍路は弘法大師ゆかりの霊場を回る「祖師巡礼」である。このような文化的文脈があつてこそ、ただの遊樂的行為を、行為の因果関係も含め、特殊具体的文脈で解釈することが可能になる。ただし、西国巡礼が次第に遊樂のウエイトを増してきたのに対し、四国遍路は信仰目的の移動が依然として重要であるように思われる。歴史的に四国遍路には、女性に加え貧民や病人遍路が多い。このような移動を支える社会的・文化的仕組みが、御師・宿坊や講組織の発達であり、四国遍路における接待習慣である。

参考 新田目夏実「宗教と国内人口移動・人口分布—日本の事例—」早瀬保子・小島宏編『宗教と人口』原書房、2013年。